



猩々曉齊画

菱湖堂

童女學文

小説社發兌

定價三錢五厘

服部應賀著

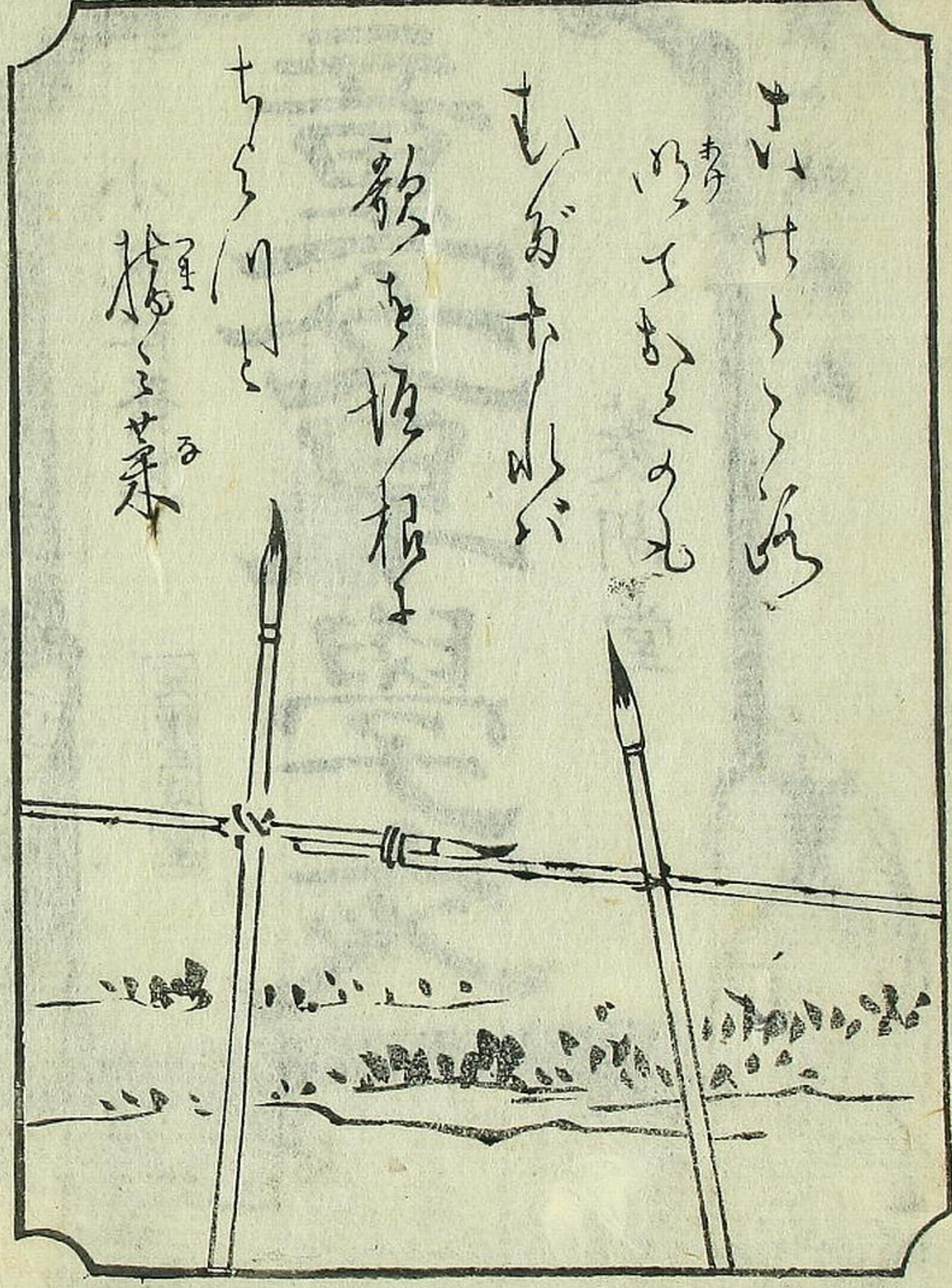


柳田文庫
文庫11
A1480



文庫11
A/480

官許 明治八年二月十八日



48-7687



童女早学文

服部應賀著



○ 是は学文を人身の便理を論を世上の宝みれば其書物由往昔より次第に殖く今ハ種々ハ區別殊の外多くみれども其中ハ五年ハ十年のうちハ一度ハ二度其益を見らる見ぬの業あり又一年の中ハ其如き業由り又一月の中ハ同断まる由り其五年ハ十年の中ハ一度ハ二度其益を見らる見ぬといふ

天文地理兵学の類を以て其一年の中其どきどき
の暑寒を隔てて四季ふらふる業を以て其一月の中
同断とふらふ衣食住ふ充らざる雑業及び遊藝此
業を以て以上夫等の業を学ぶる第一師を求暇と
金賃を費して能学び得とも今日の經濟修身の
必用ふらふ迂遠業を以て吾粵ふ師を求む暇を謝
礼の費さび今日唯今人身ふ片時も放へらざる
の便理を。童女婢僕ふあつらひんが為ふりすれ
ば是を童女早学文と号く叔普通の人を称して

親と号又子とよむの親と而已子とのと定まる人の
まく親も始り子あり子の后の親と成りゆへ子の
時の悪人親とありて善人ふも愛ぶるに親の教ある
子の親とありたる者の中ふ。其身懦弱あり又子を
教ぶる者ありて親の教ぶる業を子として知らぬ断
るれば斯の如き親子の値遇たる家を必しも僅の
年月ふ其家名を失ふる掌を指がどし爾一夫而已
ふもあつらひ昔より益者三友損者三友とのど当
時の益友とあるべき者少く損友の藪枯のと世上に

繁茂えんをけしむむ譬たとへ其親の能教よくせんと由ゆ此損友
ふまどる子弟しやくていいよく身を保たもつ是こゝのさ由ゆあつて
此損友の悪徒あくとら等ら己おのれが口くちッッ養やしふ業わざも知らぬ
身みあて美食びしょく大酒たいしゆを恣あまむおまるとい親の金銭道具
と盗うすり嘘偽うそいつはりを以もつて他より借金かきんを借り又商人あきんどを借倒かりた
ちる此三悪計さんあくけいの外ほかふ出る金銭かきんもろと身みの破滅やぶたの
始はじめより寸尺すんせきを計かく如ごとく此原由このはらゆとゆふと近來中
人以上の親達おんちち子孫しよんの為ためとて地面ぢめんを求め或あるは地
震しん火災かさいの要便ようべんとちりて家うち作つく土蔵どぞう等を堅固けんこに

造つくり建たて子こに讓ゆづれども其親終おひつて其一周ひとしゅうのみま
ど来きたらざるうらふ其地処そのぢぢも他人へ取とれ家作見世
蔵くらも他人の住家すまぐと替かへる家あり其親地震火災
ふの能心よくこころづけども子が家蔵けくらを保たもつ活計かつかいのよに心
附つぎとが親の丹情子たんせいしの代しろふ至いたるこゝ忽たちち水みづの淡あと
どなる是等これらの親が子こを育そだつて見みるこゝ其子そのこいまど
乳房ちぶさを放はなしぬ頃ころより親の奢あやを無心むしんの子こふ移うつ
て美服みふくをまゝいせいまど味あじもあつざる子へ高價たかねの
菓くだ子こみどとあつこゝまが無心むしんの子こといども美服上味

の甘味と始めて是が再び麤服麤菓のさうは是
と祢るふこやく我儘を慕りて泣さけがらひ夫と
防ぐんとして其望おまらせ或る葷酒をさるゝ真に
のつて親の手づつ已か天窓みぞを子に抑うまらる
ゆへ子の善悪の差別のさうば自然親を侮どかこ
先入をれば后お誠むると改ると成るゝそのさ
其子六七年より手習食業と習せらふも下僕
下女と附まらせ双紙の扱ひ墨をぞ摺せ又風
雨の日の親よりして途中を厭ひて休ませ杯する

終ふ食業のゆくりさ倦て偽病を構へて怠る
とつども其師を心お俳ど下人の子より謝礼の
多きを顧て本意あらはれども其子の機嫌お
まうせ其附添ふ者へも輕薄なるい當世の風なれ
ば月々の謝礼を下人より多きとども其学ぶ業
も下人の子の半おゆいされば此子成人て活
計の業お不熟なれども幼より身お深なる美服美
食も一日お忍てあつて終お破産して件の損
友の徒といふ蓋是お反つて誠む親い我子成人の

鶯に附親と云ふは

是も三五

揃ひ一鶯の

数鶯の

子を附

おけが

自然と

其よは親鶯の

声のよとあるのへ



人の子も能師匠

まことよは友小

交うすまが

善人とハ

あつ

迎也

姑娘の親の

平元ふあいてり

数鶯の子が数親とあつより

あつちか



悟
悟
悟

上美服セキを着きら上菓子ウエを喰くれ酒サケを吞のまるやうに小この
童わらわの時ときに麁服セウフク麁食セウシキをせせて嚴げんに教しへ他家トモへ出いでく
活計カツケイの辛しん苦くを習あひまひ縮ちぢむ尺蠖セキカクの身みを延のばす
親おやの代しろに家藏ケサウとも子この代しろにつくて造つくり
建たつ者ものあらはは是こゝ唯ただ童わらわのうちに辛しん苦くと忍しのびを資し本ほんに
けり此こゝ辛しん苦くの人のうちにあらはは五穀ゴコク草木ソウボク由よ暑しよ
寒さむの辛しん苦くをつくるがおへな花實ハナジの美みを聞く時ときあら
るみれば人の親おやとしての童わらわの時ときに嚴げんに教しへ人の子こ
としても童わらわの時ときに必かなず辛しん苦くを忍しのぶを證あげして

雜業の部

○法ほを嚴げんきをしてしるを古ふる人大海オホウミに譬たとへる
宜よろあり小溝コミヅを侮あはれるを度々たびたび墮おれる大海オホウミへ落おれば
命いのちがあるをと恐おそるをかつる者ものなり今日けふの業わざ
およ此こゝ輕重けいちゆうありを戸障子トサウジの明あきを輕かろく
きりのと侮あはれるを明あきを放はなして去いる者ものゆりり又また
メをみる者ものあらはは金簞笥キネダナの戸かど棚たなの重おもいを
れば戸かどを明あきをして去いる者ものあらはは何程いかにの愚おろかし
鈍者どんとしても雪隠セツインの戸かどを明あきをして去いるをあらはは

尻をさげぬ出さる一度もなり

○夜中寝ながら家を起こし其家名を
呼んで戸を叩き唯戸をくく時を其家由
隣り何の家かと疑て速に答ひせぬの
裏家の奥を起し始より用向の家名を高く
呼んで木戸をくけが長屋中の者も残らぬ目覚
させ無益なる

○米を炊く時を其桶の中へも
べーさすきび麩も小石も眼も見
白くかへ夫を除

き夫より水加減も火を焚くも釜の中へ
入るときも其飯不出来といふ
お田んぼ汁を煮るも何と煮焼
心を入ると入れ上味くも下味くも
煮人の

○諸商人の賣始なる引札の文句も
らば御用向と認めよう
少く不拍と書いより其上何月
て配札をたすことあはれど夫の
定まぬるも不摺立て都合日
賣始する便

理^りふちよけまじり配^{あき}札^{さし}たる日^ひのこみ引^ひ札^{さし}を見^みふ
りぬらふらふまじり本日^{けふ}の日^ひと書^か入^いらふ越^こえらふ
○家内^{うち}を掃^{はら}除^りするふち、帚^{ほうし}の先^{さき}を止^とめて掃^{はら}べ
先^{さき}を止^とめればまじりせむる墓^{かみ}上^{うへ}へ舞^まあがり外^そへ出^でば
又^{また}塵^{ちり}を遣^やふふち戸^と障^{ざう}子^しを先^{さき}へ開^あくべし必^{かならず}疊^{かさね}の上^{うへ}
いさくく極^{たぎ}うらび

○心^{こゝろ}不^{まご}誠^{まこと}なる人^{ひと}も他人^{たにん}へ用^{もち}向^むと頼^{たの}む時^{とき}たうり心^{こゝろ}切^きを
述^{のたま}其^{その}用^{もち}向^む整^{ととの}べ其人^{そのひと}を見^みえてせぬ日^ひへ再^{また}びも用^{もち}
事^{こと}さうのいふと又^{また}譬^{たと}へば一^{いち}圓^{えん}の報^{かひ}をよる方^{かた}へ八十^{はち}銭^{せん}の

品^{もの}を贈^{たま}つて睦^{なご}む者^{もの}あるが他^たの自^{みづか}のあふら
ぬまじり報^{かひ}の品^{もの}の過^{あや}不足^{ふそく}をまじりぬらふ日^ひへ睦^{なご}の合^あ手^ての
心^{こゝろ}次第^{しだい}あり凡^{たゞ}我^{われ}不^{まご}誠^{まこと}なる人^{ひと}も他^たの不^{まご}誠^{まこと}なる人^{ひと}も
と言葉^{ことば}のこゝろ切^きを述^{のたま}むと百^{ひゃく}千^{せん}の言葉^{ことば}を一^{いち}信^{しん}不及^{ふたふ}を
ず心^{こゝろ}不^{まご}誠^{まこと}なる人^{ひと}も又^{また}譬^{たと}へば一^{いち}圓^{えん}の報^{かひ}をよる方^{かた}へ八十^{はち}銭^{せん}の
るのいふら

○都^{みやこ}て物^{もの}の名^なを附^つくふ心^{こゝろ}を用^{もち}ゆべし美^み倉^{くら}も
盲^{めくら}ふ紛^{まが}ふ人^{ひと}力^{ちから}車^{くるま}ハ人^{ひと}の衆^{しゆ}車^{くるま}日^ひへ名^なを以^{もつ}緯^いと附^つく可^{べし}
あり其^{その}子^こ細^{こま}も馬^{うま}車^{くるま}牛^{うし}車^{くるま}蒸^{むぎ}車^{くるま}風^{かぜ}車^{くるま}水^{みづ}車^{くるま}の外^{ほか}も

人力を以て引ぬ車ひろのるおんりきが由ゆへりり當時たうじ鵬翔おんりき丸
 とつ小船の名を見よ此名を旧幕府の時もあり
 舟艦ふねの名も不祥ふしやうの音ありと疑うたがひし不案ふあんのど
 間まゆるく海上かいじやうに亡消むじやうを又浮婦うきふ丸まるといふ船の名を
 も見よが是をどりやう走はる小船の底の遅おそきやう
 おも思おもひる物も名もよつて祥しやう不祥ふしやうのありき
 のおもあつるべきが又注意ちゆういしてよ
 次号早々登兌

童女早學文上 終

立里女早學文二号

服部應賀著

人の智ちと才さいと其趣そのしゆ同どうトやうあるはど智ちハ露るのどくくに
 ちて枯かる物を活くわし才さいハ霜しものどくくありて活くわる物を枯かる
 あり警けいへへ辨べん舌ぜつを巧たくまて他たの金銭きんせん諸物しよぶつを誰たれきとと或あるハ
 人の開闔かいかんを穿うて盗ぬす入い等どうハ皆才みなさいの働はたらく処ところあり然しかるに
 其惡業望あくごうぼうお任まかせと天てんの靈數れいず國法こくぽうの刑罰けいばつハ遲ち
 速すみあると必かならず遁にんまざるものと我われと我われ顧かへる是こゝを

智といひのさきび智者の目の前ふ金錢山をみる事とも
後難の利徳の毒蛇不見做しと夫を採む才士の此
見ざるに能はざる故に盗り人を殺し終ふ
其返報不血を果を者今諸人の見る事ありあり
智を以て智を働くもの坐して遠きを志し自他
長久の利益を宇内小營むもの智の外不
らくる智ハ審る善理を決定するもの也
聖人不譬ふ慧ハ心を制して分別するもの也是を
賢人あたると獎て智慧者と成るべし怖て才士

と成る者

○ 才を以て才を働く者ハ日を數へて没ぶ譬ふ
社寺の説教及び狡猾の親ト相者怪談を勸善
懲惡不ぞらて愚俗を恐惑あきしめ神仏の崇
除杯と号け不肖の敗を貪りて自口を粘るの
計束とさると其答頭さざる事あり
○ 才を以て智を働く者ハ日ありて没ぶ譬ふ
無學ありて詩歌文音を綴る不古人の秀句
のこそ拔萃し自名不摸擬し大人先生の名を

受け時明と博識先達の眼ハ掩ハとざるもの
るれをあらせ

○晴天傘を製をとりの語あり傘ハ雨天の用具
あると雨傘の製せらぬものとりを以て人の
諸業ハ懈怠するを誠めしむく翌日の用ハ今日
より仕つけ昼の用ハ朝より仕つけ夏の用ハ冬不
仕つけ冬の用ハ夏不仕つけるを誰由よく兵へ
その是とも兎角用ハ足らぬものあり都て用を
使ふ人も必を樂ふとて業を早く調ふ用以使ハ

見る人ハ年中骸を控惚くして業ハ追まごうとあり
用を使ふと用不使はるるとも遠ひ各々自必不考へ
見て知る也

○履の鼻緒ハ色目を次りて心の強を專一ふを
近年仕入の鼻緒ハ無益の処へ緒を長く見せ
心甚ど弱し下駄草履ハ鼻緒を以て命とせらる
ものなるも鼻緒の代理とるべき緒を懐中し後日
自他の助けの用意とせらる殊小なり
○夜番火の廻りハ何方由拵を却くが更其構の

家内六可洗

主人

主人の服を

掃除せよ

割てはくぬ

家内ふきまわ



女房

針 糸やめんま

と糸やうり

取あてはき

の屑をぬく



長男

掃らま

おのがりの

まをぬく

家の隅



むすめ

家の隅

をぬく

世間の

心



舟女

いそめしき

あまのこころ

あまのこころ

あまのこころ

あまのこころ



家僕

他家へ来た

上つて来た

家僕

あまのこころ



者ハ其音を聞て寐心を安くまよども盗賊火附の
 為少ハ甚ど不用心の仕業あり偷者ハ夜采田の聲
 拆を聞バ物影不忍で其過るをもち夫より時間
 を計つて悪業をさるりのある夜番ハ奇き者と
 見付リ相圖の為不拆を懐ホりち時間を定久
 無言隠密ホるるを誠の用心とよども近年カマイク
 如き烈しき盗風あま火の用心の外又火の用心も
 きる金一

○人を教訓する其表裏の二道あり未ど此を

錯らざる者へ對し人一度此を錯まば生涯元不復せ
ざるの理を論は是則ち表を以て表を論せざる者
是を又此を錯らざる者論しとを言ふ翻水器不歸ら
ざるの意より其者の氣質通塞して一生沈淪するもの
多きは此錯らざる者へ對し又誤るに改る不憚ること此を
論は是則ち裏を以て裏を論せざるもの此裏を又
表のさうととを言ふ無瑕の志操の油断ともあるもの
差別に注意せざるに教訓不齟齬あり彼主と親とを
無理あるものと知るべし下人已採て主親のさるべき

語れあぐん又下人の足ざるものと知べし
採て下人の取べき語れあぐん古歌に「木下竹の無理を
いふともをこそがあやむをせめてあけやあが笑ふらんと面白
く讀するが上品下生の親御の耳に聞せさるる歌あり
○親も子の衣服の立派を好む世上の常あること中人
以下の者も其此の分限をよく守るべし是を守らざるは
折角諸人へ着て見せる衣服也不反つて其此を誹
はるる人の散心を入る上箱るるに譬へ上箱に粗
服を着まるとも心不さへ美服を着るとも百目の視

さうろ百指のゆびさそを処誠不立派あるりのるるが外
ろ見へぬ心い曲つても幼強ても上箱さへ美一けさ
肩此が廣くと曲行算調とく着て出と処い流石よ立派
あるとど由不義理を侘るよ井戸の鮎の如く彼方此方へ
鼻の窒る処ありてへ上着の美より心の粗服が立派に
見へるりのるる

酒好の中不酒を充分不吞うるる酒陶不酒の
吞余りある顔を嘔て無理不夫を吞るる服へ酒を
捨るとりふりのるる酒不限らば萬の食物を服へ

過さる病の種蒔るる同ト捨る物ある口の外へ捨
るが増るる侘一夫を無益不捨るふ由及ぶ揚泉の
物理論不日

穀氣元氣ニ勝バ其人肥テ壽ナガカラズ元氣
穀氣ニ勝バ其人瘦テ壽ナガシ性ヲ養フノ術
常ニ穀氣少カラ使レバ病生ゼズ矣

犬猫の家内へ閑する時ハ声を多ホりあて追ふ
聲一声を止荒く追ふ時ハ其声不驚きとて意外の
処へ飛上りて器物を損むるとありや迫る時ハ人を咄

○住家の新しき柱戸障子も直るまじき
年振小従つて其間へ透間を見る是を規ふ無論
曲りしる柱の方るまじき夫れ手重き直る
戸障子の方を柱小馴致する世上の常り臨機應變
の義を以て理と物小於て大小の理均しかる
とゆるる也

○器を造る小蓋のありてぬ物へ附る蓋るぬ
何れもあつてある物の其れを物の出入り必能く
とて家内の諸道具其置処を常不定めわけ第一

坐敷もとりまきり暗がり小誰か手不出り入るも安け
ども余り眼の前より眼の中へ開つて見ぬのうへ何
この家の道具小鉢其置処不有ハ少
○人の慎み何事由始不限るあり一度悪敷交不交
りて人小毒を螫蜂と化をさる後悔と化を立る際と
ある元元の蜂仲間き傳へて芽出の花の露を吸之と
さる己元此蜂あるは是を拂ふと此此外蜂の時
人を螫遊めと旧取再発と何れも借財鬼とある責來り日
延ハ寸も聞ハ此時鬼ハ外福内と蒔ちるを余討の金の豆ガ

むづ難義の関の年

を由越さんぐさの中

登廣の上らまは又

元の奎阿弥とるり

六日のあめり元日の

松賣とるりりり



中

此次号の世俗の便理を悉くあつて満尾とす

童女早學文二号 終

天網市虎狩

諫譬 服部應賀著

○
 夫明治といふ年號へ人の舊を垢を洗ひ捨て明
 不治るといふ熟字も一周して今年一不戻り再の洗
 濯晴天とありまゝとゆへ何君も身と明ららぬ御信
 心をあきらめ能とゆうさばそれどころ私に此間より
 用暇をかひて右左の神仏へ参詣して悪事災難
 と免れ其上にお金も着物も沢山出来るやうに

信心を致し、ぢりやろ被仰お方ありあらんが夫ハ其信
心でハあく神仏をせむ骨せむとつふりのみれば其利益を
有まをん其やうをか人ハ限りて参詣の道で男
あり煙草入り女あらく算くりと落し其上えん痲痺と
寸白そびとハ血の道とりて腹を痛め足ハハ豆を
踏出ふみだしてかうへり帰かへりをさるか方もあるが病難除ひやうなんぞのお守
護ごすでを懐中くわうちゆうして健康けんこくのお身をかま勞まいふさ
ねてハチト不都合ふごうをま誤までハありまをんり既
神哥しんかまの〇心どふ誠の道ハあ悩あひるべ祈いのらんと

ても神や守らんと有ま。信心とハ信まことの心とつふ
ことあれば男ハ自分の家業をま勵まと女ハ家内うちうちの可べ為べ
業いそと怠いとらぬが誠の信心あれば其信心の中よりお金
を着物いを沢山いに出いすをゆへ其徳の餘りを以て参
詣まとをまんまとま宜よろしまうと申まさまば又まもまんまを白癩びやくらが
有ありあるあ誰たれもか金や着物いが望ま欲まらればこそ参
詣まを為ますの夫おが其まわまるま事まあり神仏しんぶつハ拜ますまると
此方こ方まより拜まびま訳まのまいまと理屈りくつを言ますまりも其ま驗まを
見る為まにま兩人ふたり申ま合ませて朝あの八時はちじより夕ゆふの六時むつきを限

りとして一人の家業を営み一人の以勝手次第の神
仏へ参詣をせられてお金でもお米でも何でもかでも欲
と思ふ物を沢山授るやうに能拜と夫り又否物か
あるやうに貧乏神と山の神でも病氣でも怪物でもお
引取を願ひしはくお百度でも二百度でも踏で戻り其
時限の合手の者と其日の店勘定として見るに家
業の取附と合手は必む十四五銭の利徳と手は握れ
ども参詣の方の神仏はくお土産一品くどもお上り途
中へ蕎麦の餅の飯の酒の十四五銭の身銭

を費しとるに合手の儲け混トて競て見まはくと合手は
二三十銭の得で参詣人は二三十銭の損よりけり壁へ
途中で一文も遺めると合手の儲けどの損はありやと
此やうにふりさば神仏の誠は無益のものと思召さるる
中々おわらざるのでいかに神仏の二体の原水波の隔
りて其主は萬物の一矣もれば参かくも天子より聖
賢君子の参詣をせざる尊とものあるが心は信なく
唯出歩行のものと信心と思ふか方へ對して右のごと
く押歴の理屈をせよと其理は附て出歩行め

お方へモシ神仏より夜罰を宛ゆりし譬へ三千余萬人
の夜罰ありし一束ありて私一手に引請申上
りし此先か聞ふ入とをくふ山くあれども下手の談
議の長過るハ鼻毛の長さをよりとくふそのの
ゆへ此先か預りありて是よりハ皆様方のお身ふ
りる大愛かことが出来しこのをかあつてもうせむ
唄淨留理とを聞かざるか身でかく身の為を心ふ聞
身あるお方いありとくは是を聞かざる可が聞身
かきお方い又例の世味言う聖人の語ふも朋友數

斯疏と書てある其本を讀めと見つて親兄弟の異
見さつと聞ぬ者へ對してつらざるお世話其方ハそつ
ちの骸ゆへ善と志とけりやそつちでせむ此方ハこつち
の身業世をもむ。譬へ躑がりと例うよソツチの骸の
助はうけぬと顔と価るお方を最愛く思ふの過
去の善縁、悪縁り夫ハあつねども又とつみとも志れぬ世
に生合せし縁をもて捕つしお袖を放さぬ訣ハ此
やうにお方ハ限つて忽ち憂目を見るハ必定まゆへ
其時ふあると前の利口ハ捨言葉とをりてア、ま

○圓白 報立身 咄斎



此印の付者ハ主人の勤を能く親の心不能く以て其身を錯らぬ者ト人の妻ト一夫ふよく志すハ以儉約をまりんて子と能く教り者と女色の殺せせむお学問の精といふこと

男女の子世の為を心おける奇特人のるいあり

●圓黒 報面皮



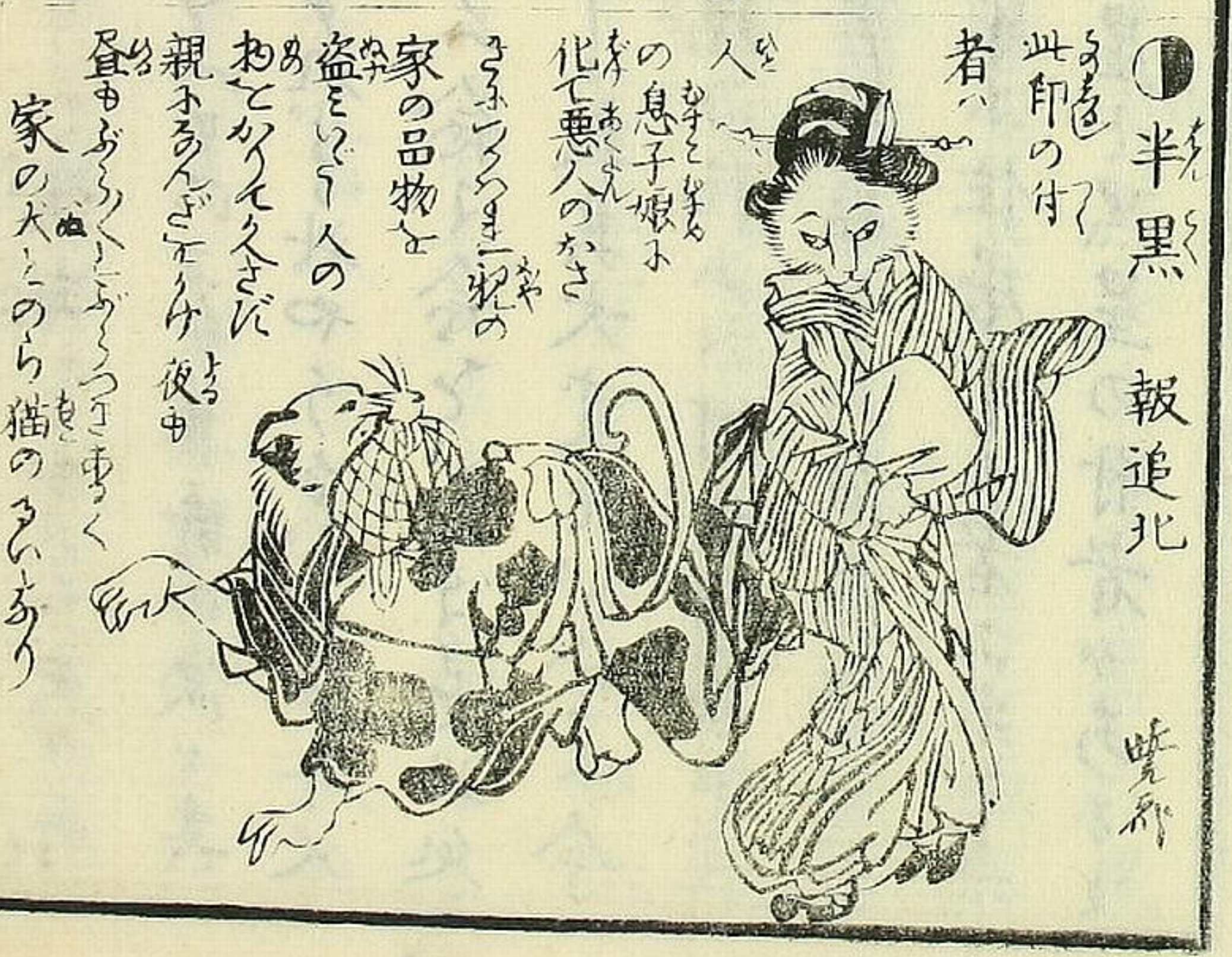
此印の付者ハ人の皮をかりて人トあざむく我れを害す父母の肉を食ふ市の虎と人の子を悪たふくける仲立と或ハ人の

▲鱗黒 報額印



此印の付者ハ男女の商人と化して偽物と賣る者機品をりけて村々をめぐり狸と人の畑の作物をぬき人々を集めて悪業の仲宿を賣物管の上げさかそりといふ世をくるる古俗のるいあり

●半黒 報追北



此印の付者ハ人の息子娘の化して悪人のかさきつる家の品物を盗む人のおてけえくさば親小るんて夜中登りおらるる家の犬のら猫のるいあり

んを身と有りしつと涙をこぼして後悔をかきふる夫が所
謂轉でうらの杖ぶのそとツムとの少く其時の涙が其
憂身を救ふてハ呉ぬもの多れども此やうお方ッ十人
の中ふ七八人のありせんゆへ念々念をいれまはす此処
とよしくお聞おと下るづー扱其大変といふて今
度家々の門口へくる新規の札ハ何區何番戸主
何の誰妻とれ長男誰二男誰娘とれ隠居誰下男
誰下女とれ寄留誰と一家ハ住居する者の名と残
らば一して其名の上ふ白星と黒星の付者がある

かり是を白三黒の表札と号け其白星ハ善人黒
星ハ悪人の名と申せども是を以て嫁や婿を取ら
ず遣ふも互に近所で聞合をすれば悪と噂のある
者でも善く者もあり又自分ハ意趣でもある者ど
とさんぐふ悪くいへを互に善嫉智を取そこをひ
とまてる遣うところをいふもせうが此札がうれば聞合も
しつむ互に其札を見れば其當人の勿論一家人の
善悪を一目で志れる札ゆへ是ハ大変なことでハな
ひと思ひやうとが今度市の虎狩といふことが有ら

付區々しん新起せん撰舉せんされしと虎調様のこてうお咄おふハ
ありごとくも我國の山々やまの虎こといふもの一疋ひともをけ
れバ開國くわいこくより此こく虎こふ喰くれる者ものとてハ一人ひともを
りしふんめん人面虎じんめんこといふ虎こが人の皮かわを冠かんりて人の中うちに
離居りかりて善人ぜんじんと害がいしる昔むかしより多くあり。ま
漢土わんちハ真まことの虎こも何なにれバ此人面虎じんめんこもありて善人
と害がいとと甚ひどく多おほくんバ或漢國の忠臣某其國王
の御前ごぜんへ出いで云いふハ私わたくし是こゝより他國へ出役しゅつやくと致いたす
ふつと一言ひとことと君きみハ申上まをすん今いま一臣いちじん君の御前ごぜんへ進

と出て只今某市まちふて虎と見と申上まをす君ハ誠まことと
ハ思おもひ申まをす其処そこへ又一臣いちじん出て其こゝへ申上まをす
半信半疑はんしんはんぎハ思おもひ申まをす其処そこへ又一臣いちじん出て其ごとく
迷まよひ其時そのときハ誠まことと思おもひ申まをす一ひと元もとより虎ハ市いちふると
いふものども三人さんにん詐いつはりる時ときハ無なしる有あり又善人
と悪人あくじんとあるもの譬たとへと申上まをす市虎いちこの難がたり
あふ者ものハ少すくなりしと云我國の頼朝君ハ先例せんれいも
あき日本にっぽん総追捕使そうしゆほつしふられて富士の牧狩まきかりハ
ままりが此虎狩ここをまりめゆめハ忠臣の畠山重忠

和田義盛の一族其外数多失ひの殊ふ勿体なく
も二代三代の將軍も此虎の爲に虎変死をせしげ
させられてより遂に何聞ゆるぬ星月夜の鎌倉も
田浦とありしに遺憾をありき然るも當今明主
の下に明臣あらはれて其市虎ハ勿論凡て父母
良民の害をなす家々も離居する鈍獸を成く狩
尽して清潔のお國とせざる良策と我々命せし
れらば其家々を探索して五常を具ふ人間
とそれと犯す獸類とを區別しざる表札ハ疾ふ

出来まれども是を掛て一目ふ善の頭よりよけれ
ども惡のあつるもの甚く見苦しくもあり又歎
くもあるとて虎調中會議を立し皆同様ふ發
言せし人獸間昧の者はより一生人間ふ定まるら
獸類ふ定まるらと嚴しく説得をせしき其中心ふ
前非をくひて獸心をあらはる固く人心ふ帰伏せ
る者もあるば其父母一族の喜ぶれば其獸心を
削りぬして札を掛べしと是に評議一決せし
ゆへ明日●半黒の者を虎調の狩屋へ呼集めて

脰部應賀小説新話

修身十代見草	虫類大議論
方今身代を修	童女早学文
智恵の辨	當世利口娘
權兵衛種蒔論	同 二 號
金庫三代記	青樓半化通
驕人びつろ箱	鬼美だんぶ
諸藝畑水練	孫兵衛活計論
近世あきま墓	谷 覽 會
天上大珍事	懲面於抜ぼこ
東京花毛抜	ニヤアチウ談
馬鹿の大妙藥	市の虎狩
日本女教師	深山かゝる涙
みろり男	影 弁 慶
太郎兵水裁論	御弊う法ぎ
ぶつろ懲面箱	ノンベンガラリ

小説社書林

造化天心録	牛 馬 論
活論學門雀	小夜子
賞罰天カラフル	諸業焼石水
蒙六雜志	當世利尻ハツタ
開眼文明論	万亭置土産
芝三島町	和泉屋市兵衛
馬喰町三目	山口屋藤兵衛
芝三島町	山田屋甚七
浅草地内	大橋堂彌七
照降町	惠比壽屋甚七
横濱	中屋銀二郎
新大坂町	鶴屋喜右衛門
小傳馬町三目	山崎清七板

010190528419

天網市虎狩上 終

其教諭をしとくとしふ処までと聞きしとが是でハ
 ナント大變をこそでハ有らせん併し明日の夜説
 得て獸が人間小なるあり此やうをあらがひるも
 又有らせん明日の夜説得の妙案ハ此次号小
 委しく述りしと必し覽下さるべし

西京書林 勝村治右衛門	大坂書林 秋田屋太右工門	長壽酒屋町 安田與平	箱館 魁文社	名古屋書林 永樂屋正助	甲府書林 藤屋傳右工門	静岡書林 浪花屋市藏	駿州沼津 擁万堂壽三郎	三島書林 堺屋又三郎	信州善光寺 小井屋喜太郎	上州安中 平卷屋喜平二	高崎 文心堂源作
越後新堀 小林屋茂助	白根 淺間六平	三條 中村忠右工門	水原 杉名屋定吉	長岡 鳥屋六平	羽前山形 荒井太四郎	雁ヶ岡 地主屋文藏	石黒屋珍右工門	小池藤治郎	仙臺十九軒 菅原屋安兵衛		
白木 山年屋忠兵衛	安次 叶屋儀右工門	京都 西屋利平	下總佐原 正文堂利兵衛	武州川越 岸田屋文吉	八王寺町 小町屋徳二郎	横濱 師岡屋伊兵衛	熊谷 近江屋平吉	鉸能 大河原章一郎			